OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	物忘れ外来を受診する高齢者とその家族について考えていること
Author(s)	佐藤, 眞一
Citation	生老病死の行動科学. 2010, 15, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/9374
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

巻 頭 言

物忘れ外来を受診する高齢者とその家族について考えていること

About elderly outpatients of amnesia and their families

佐 藤 眞 一

アルツハイマー病の記憶障害を軽減する新薬3種類が認可されることになりました。現状では症状の改善薬ですが，本態の治療に迫る新薬あるいは予防薬が登場する日が徐々に近づいている予感がします。そこで重要になるのが，アルツハイマー病の早期診断と発病の予測です。MCI（Mild Cognitive Impairment，軽度認知障害）がアルツハイマー病の前駆症状として注目されている最大の理由もそこにあるのでしょう。物忘れ外来を受診する高齢者に対して，認知症を発症しているのか，それともMCIのレベルなのかを判別し，より早期に適切な医療・福祉のレールに乗せることはとても大切なことです。しかし，最近，私はそれとは別のことを考えています。

メタ記憶と呼ばれる自己の記憶に対する認識は，我々が新たに開発したメタ記憶尺度MSSC（Metamemory Scale of Self-Confidence）においても，あるいは従来開発された多くの尺度においても，高齢者は若年者よりも自己の記憶に対する有能感が高い傾向にあります。すなわち，高齢者のメタ記憶は決して低くないのです（Shimanouchi & Sato, 2009）。このことは，社会的常識と対立するだけでなく，高齢者が自らの記憶の衰えを日常会話の中で頻繁に口にしているという我々の体験とも矛盾しています。その理由を検討することは，老年行動学的に非常に興味深いのですが，ここでは，物忘れ外来を受診する高齢者のメタ記憶について考えてみたいと思います。なぜ物忘れ外来を受診する高齢者のメタ記憶を問題にするかというと，当然のことながら，そのような高齢者は，先に示した高齢者一般とは異なるメタ記憶の特徴があると予想されるからです。

物忘れ外来を受診する高齢者の認知能力をMMSE（Mini Mental State Examination）などによって測定すると，記憶を含む認知能力は決して低くなく，正常範囲に入ることも決して珍しくないようです。もちろん，平均の範囲を超えて記憶機能が低下していて，日常生活はそれなりに自立しているものの，MCIと判断せざるをえない高齢者もいます。しかし，どちらの場合も，本人やその家族が記憶の衰えによる認知症発症の恐れを訴える点は同じです。そして，特に前者の高齢者に対しては，こうした訴えは「うつ」によるものであり，物忘れ外来受診はMCIではなく，「うつ」が原因であるとしてその治療が行われることがあります。

私は，心理学者としてこのことに引っかかりを感じてしまいました。物忘れ外来受診の「原因」としてうつ状態の治療をするだけではなく，そのようなうつ状態を引き起こす「原因」を探ることが重要なことではないか，つまり，うつ状態は「結果」と捉えて，その原因は何かを探り，どう対処するかを考える必要があるのではないか，ということです。そして，それが反応性のうつ状態であるならば，この問題の「原因」は日常生活の中にあると予

想しています。

物忘れ外来を受診する高齢者やその家族は，日常生活における物忘れに対して認知症発症の恐怖を抱いています。正常な老化の範囲であっても，老いが進めば記憶能力は低下し，日常生活における記憶の失敗は増えるでしょう。配偶者や親のこうした記憶の失敗に頻繁に気づくようになった家族は，もちろん自分の大切な配偶者あるいは親のことですから，その失敗を指摘し，失敗回数を減らしたいと願います。しかし，家族によるこうした記憶の失敗の指摘は，高齢者本人にはどのように受け取られるのでしょうか。記憶の失敗は，他者の指摘によってはじめて気づかされることも多いはずです。このような指摘が頻繁に繰り返されることは，本来は高いはずの高齢者の有能感に脅威を与えてしまうことにならないでしょうか。

このような視点から，物忘れ外来を受診する高齢者のメタ記憶を測定すると，やはり一般の高齢者よりも低い傾向にあります。つまり，記憶の失敗が多くなった配偶者や親の老いの行方を心配する家族の言動が，実は，当の高齢者を有能感が低下する方向に追い込み，それがうつ的な精神状態を作り出している可能性が示唆されたのです。

物忘れ外来を受診する高齢者の大きな悩みの元は，このような家庭内の日常性に存在しているのではないでしょうか。現在，このことを調べ，その対応法を開発する研究を看護師の資格を持つ大学院生と共に進めています（中野, 2010）。

しかし，配偶者や親を心配する気持ちから発せされる家族の言動が，実は当の高齢者を心理的に追い込んでしまっているとしたら……。改めてケアとは善悪を超えた行為である（佐藤, 2005）と実感する今日この頃です。

文　献

中野雅子（2010）. 軽度認知障害（MCI）高齢者の日常生活における問題意識に関する一考察. 第30回日本看護科学学会学術集会，札幌.

佐藤眞一（2005）. 認知症患者と介護する家族を支える：2. 介護に潜む危険性, 家族ケア, **3**(7), 10-13.

Shimanouchi A. and Sato S. (2009). Age effect on memory self-confidence. 19th Congress of the International Association of Gerontology and Geriatrics, Paris, France.

.....

「生老病死の行動科学」第15巻をお届けします。昨年よりインターネット上での公開も開始しましたので，そちらもご覧いただければ幸いです。

大阪大学学術情報庫（OUKA）http://ir.library.osaka-u.ac.jp/web/LASD/index.html

また，本分野のホームページからもご覧いただけます。

臨床死生学・老年行動学分野ホームページ　http://rinro5.hus.osaka-u.ac.jp/